

施設隣接型の小中一貫教育における児童・生徒の言語力を育成する学習指導の在り方

～ ICT 教室を活用した小中交流授業を通して～

キーワード 小中一貫教育 主体的・対話的で深い学び

学校名 茨城県つくば市立吾妻学園小学校

所在地 〒305-0031
茨城県つくば市吾妻2丁目16

ホームページ
アドレス <http://www.tsukuba.ed.jp/~azuma/>

1. 研究の背景

つくば吾妻学園は、吾妻小学校と吾妻中学校による1小1中の施設隣接型の小中一貫教育校である。本学園では、21世紀型スキルに基づいて開発されたつくば次世代型スキルを各教科・領域でも育成していこうと次世代型AZUMAプランを作成し、各授業の中で実践している。

本学園は、施設隣接型とはいっても、実際には小学校と中学校は約3km離れており、教員による乗り入れ授業や小中学生がそれぞれの学校を訪問して交流する機会は年に数回程度しか実施できていない。教員や、児童・生徒が交流のために移動する時間は20～30分程度を要する。移動時間と安全面の確保という障壁があるので、頻繁に往来することが難しい。

その時間的・空間的な障壁を乗り越える存在がテレビ会議である。本学園にはタブレットPCが児童・生徒7人に1台の割合であり、電子黒板や書画カメラも各学年に1台ずつ整備されている。各教室・特別教室にも無線LANが整備され校舎内ではいつでも・どこでもインターネットに接続できる環境にある。それにもかかわらず、テレビ会議による小中交流授業は年1～2回程度しか実施されていない。

その原因は3つ考えられる。

1つ目は、準備の問題である。いざテレビ会議を実施しようとなると、教室に電子黒板（またはスクリーン）を移動し、カメラやマイクを設置する必要がある。準備に10分程度費やしてしまう。また片付けにも同等の時間を要する。2つ目は、臨場感の問題である。60インチの電子黒板では、相手の授業の様子が伝わってこない。3つ目は、時間割の問題である。小学校と中学校では、授業開始時間が異なるため、テレビ会議を実施する度に時間の調整が必要になってくる。

1と2の課題を克服するために、小・中学校にICT教室を設置することが有効と考えた。具体的には、スクリーン、プロジェクター、カメラ、マイク、パソコン、書画カメラを常設し、電源を入れるだけで手軽に使えるような環境を整備する。3の課題に対しては、時間割に小中交流タイムを位置付けることで解消できると考えられる。

このような実践をすることで、異学年交流は促進され、必然的に言語活動の場が設けられると考えた。さらに、言語活動の場が設定されることにより、言語力が向上すると考えた。

以上を背景に研究を始めた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ICT教室を活用した小中交流授業を通して、施設隣接型の小中一貫教育における児童・生徒の言語力を育成する学習指導の在り方を明らかにすることである。

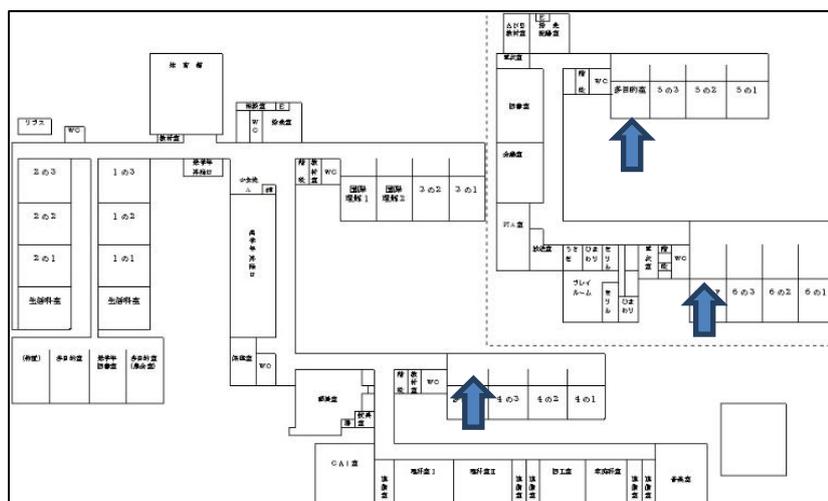
3. 研究の経過

①時期	② 取り組み内容	③評価のための記録
4月 4日	○学園研修①の実施 研究主題と次世代型 AZUMA プラン，児童版次世代型 AZUMA プランを確認する。各教科で、言語力を育成するための具体的な手立てについて協議する。各教科で小中交流授業を実施する時期や単元について協議する。	全体会および各教科部会における学園研修記録（実践者）
4月 下旬	○ICT教室の整備 名称「メディアルーム」 スクリーン，プロジェクター，ビデオカメラ，マイク，パソコン等の設置	写真（実践者）
5月 月上旬	○第2回学園研修 11月のつくば市教育委員会指定小中一貫教育推進校研究発表会に向けて，教科ごとに指導案を検討する。 ICT教室の活用に関するミニ研修会を実施し，教員間で活用方法を共有する。	各教科部会における学園研修記録（実践者）
5月 12日	○第1回要請訪問指導 社会科において，ICT教室を活用した授業を実施する。	写真（児童） 各教科部会における指導記録（実践者）
5月 14日	○EDIX参加 東京ビックサイト EDIXに参加し，発表するとともに，見聞を広める。	PPT.ファイル（実践者）
6月 20日	○第2回要請訪問指導 英語科において，ICT教室を活用した授業を実施する。	写真（児童） 各教科部会における指導記録（実践者）
7月 11日	○第1回指定校訪問指導 複数の学年，複数の教科で授業を公開する。 学級活動において，ICT教室を活用した小中交流授業を実施する。	写真（児童） 各教科部会における指導記録（実践者）
8月 1日	○第4回学園研修 11月の公開授業に向けての準備，ICT教室の利活用の研修を行う。	全体会および各教科部会における学園研修記録（実践者）
8月 8日	○第5回学園研修 11月の公開授業に向けての準備，指導案の作成を行う。	全体会および各教科部会における学園研修記録（実践者）
8月 22日	○第2回指定校訪問指導 指導案の指導を受け，修正する。	各教科部会における指導記録（実践者）
8月 29日	○第6回学園研修 11月の公開授業に向けての準備を行う。	各教科部会における研修記録（実践者）

9月 23日	○第3回要請訪問 複数の教科で授業を公開する。 特別活動や学級活動において、ICT教室を活用した小中交流授業を実施する。	写真（児童） 各教科部会における 指導記録（実践者）
10月 12日	○模擬授業 外国語活において、ICT教室を活用した小中交流授業を実施する。	写真（児童） 各教科部会における 研修記録（実践者）
11月 14日 ・15日	○佐賀県の JAPET 全国大会に参加	写真（実践校，発表）
11月 22日	○つくば市教育委員会主催「先進的 ICT 活用発表全国大会」において取組みを発表	PPT.ファイル（実践者）
11月 26日	○つくば市教育委員会指定小中一貫研究発表会 複数の学年，複数の教科で授業を公開する。 社会科において，ICT 教室を活用した授業を実施する。	写真（児童） 研究紀要（実践者）
12月 8日	○外国語活動 ICT 教室を活用して，中学生が作成したスリーヒントクイズを実施した。	写真（児童）
12月 16日	○全児童・生徒への実態調査アンケート 言語力に関する質問紙を実施し，昨年度と比較・検証する。	アンケート（児童）
1月 23日	○第6回学園研修 本年度の成果と課題について，各教科で分析・検証する。	各教科部会における 研修記録（実践者）
2月 22日	○第7回学園研修 新たな課題を洗い出し，どのように解決するか，各教科で協議し，次年度の活動計画を立てる。	各教科部会における 研修記録（実践者）

4. 代表的な実践

(1) ICT 常設教室の設置と活用



本年度学級数の減少に伴い，本校では空き教室が生まれた。

その内3教室を ICT 常設教室とした。スクリーン，プロジェクター，カメラ，マイク，パソコン，書画カメラを常設し，電源を入れるだけで手軽に使える教室である。

(2) 実践事例1 第5・7学年「常設教室を活用した交流（学活：AZUMA フォーラム）」

本学園では5・6年生と中学生全員が一堂に会して話し合う「AZUMAフォーラム」を例年行っている。本年度は「個性を認め合うって何？」というテーマで行った。



まず、各学級での話し合い活動では、児童生徒一人一人の意見を基盤とした話し合いを行った。次に、各学年での意見調整を踏まえ、小中合同の学園フォーラムへとつなげていった。フォーラム当日の話し合いを受けて、各学年の「行動宣言」を作成したが、施設が離れているため、顔を合わせて「行動宣言」について交流していくことは時間的にも厳しい。そこで、ICT常設教室を活用して、小学生から中学生に「行動宣言」を報告し、交流することとした。

交流は中学校と小学校をテレビ電話でつなぎ、リアルタイムで行うことができた。回数としては3回行うことができた。その後、中学生からのアドバイスをもとに「個性を認め合うことって何？」というタイトルのプレゼンテーションを作成し、つくば市プレゼンテーションコンテストに参加した。交流により学習を深めることができ、コンテストでは、最高賞である市長賞を獲得することができた。



(3) 実践事例2 第6・8学年「常設教室を活用した交流（外国語活動・英語科）」

ICT常設教室を活用した交流を前提に以下の実践を行った。交流はすべて常設教室を通して行った。

外国人向けの国内旅行プランを考え、be going to～（予定未来）を用いて、「どこへ連れていくか」、「そこで何をするのか」、「何を食べるのか」、「お土産に何をあげるか」の4項目をグループで考えさせ、

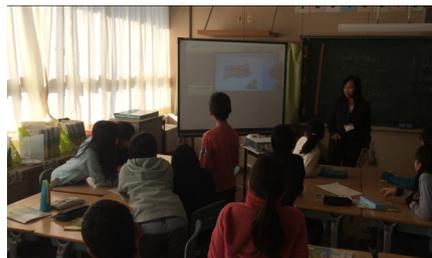


どのグループが最も魅力的なツアーを企画できたかを、中学生に考えさせた。外国人に紹介することから、活動内で英語を使用する必然性をもたせた。新出単語や表現については、それをイメージさせる絵と一致させパンプラクティスすることで、日本語を介さずに楽しみながら定着することができた。旅行会社役と客役に分かれて、グループ内で何度も練習したり、相手からの質問を事前に想定させ、それに対応する英語表現を事前に確認したりすることで、活動中もおおむね英語のみで活動することができた。

以上の活動と学習をいかし、小学生に英語劇「三匹のこぶた」を聞かせた。そして、内容を理解した上で、英語での表現の仕方を学習させた。小学生は登場人物を確認して、配役を決め、中学生と合同で、英語劇「三匹のこぶた」の練習に取り組んだ。中学生の代表グループの発表を聞き、より良い英語劇にするためのポイントを確認した上で、中学生からアドバイスを受けながらグループごとに練習を行った。



また、この実践以外にも、中学生からスリーヒントクイズを作成してもらい、小学校の外国語活動の際に、交流を行った。



5. 研究の成果

(1) 事前事後調査

27年度と28年度の2回にわたり、それぞれ事前調査、事後調査という名目で言語力に関わるアンケートを実施した。アンケートは、それぞれの評価規準に照らし合わせて、「できる—だいたいできる—あまりできない—できない」の4段階で、自己評価によって回答したものである。「できる」を4ポイント、「だいたいできる」を3ポイント、「あまりできない」を2ポイント、「できない」を1ポイントとし、平均値の変化を調査し分析した。

この結果を示したものが以下の表である。この表から、ほとんどの項目で数値が伸びていることが分かる。

表

アンケート結果(H27.12→28.7)		※数値は評価の平均値、()内は「よくできる」の割合							
		28年度5年生				28年度6年生			
		H27	H28	H27	H28	H27	H28	H27	H28
感受表現	日頃の生活の中で、いろいろな人とコミュニケーションをとろうとしている。	3.1	3.5			3.4	3.5		
	日常生活や体験的な学習の中で感じたことをすすんで言葉や文字などを用いて表現することができる。	3.2	3.3	3.2	3.3	3.2	3.3	3.2	3.3
	自分の感じ取ったことを歌、絵、身体などを用いて表現することができる。	3.1	3.2			3.0	3.1		
理解伝達	質問されたことに対して、間違いがないように答えや理由を書いたり、発言したりしようとしている。	3.1	3.3			3.1	3.4		
	調査結果や観察・実験の結果などを整理し、正しく、分かりやすくまとめたり、発表したりすることができる。	3.2	3.2	3.2	3.2	3.1	3.4	3.1	3.4
	友達の意見につなげて考えを書いたり、述べたりすることができる。	3.1	3.2			3.0	3.4		
解釈説明	物事をいろいろな見方ととらえ、目的に合わせて説明しようとしている。	3.1	3.3			3.1	3.3		
	文章、図表やグラフなどの資料からさまざまな情報を正しく読み取り、説明することができる。	3.2	3.3	3.2	3.3	3.1	3.4	3.1	3.3
	公式、法則などの学習内容を実際の生活や具体的な事柄に当てはめて説明することができる。	3.2	3.3			3.1	3.4		
評価論述	自分の意見や考え、学んだことなどを進んでまとめようとしている。	3.2	3.3			3.2	3.5		
	自分の意見や考え、判断した根拠などを筋道を立てて相手に分かりやすくまとめることができる。	3.0	3.1	3.2	3.3	3.0	3.4	3.1	3.4
	体験活動や学習活動を振り返り、そこから学んだことや考えたことなどを書いたり、伝えたりすることができる。	3.3	3.4			3.1	3.4		
構想実践	計画を具体的に立てたり、見直したりしようとしている。	3.2	3.3			3.0	3.2		
	自分のイメージや考えを実現させるための計画を具体的に立てることができる。	3.1	3.3	3.2	3.3	3.0	3.4	3.1	3.3
	話し合いの結果を生かして計画を見直し、工夫・改善することができる。	3.2	3.3			3.2	3.4		

討 論 協 同	自分の立場や言いたいことがはっきりするように主張を組み立て、意見を述べようとしている。	3.0	3.1	3.0	3.2	3.0	3.3	3.1	3.4
	相手の立場や考えを尊重し、話し合いが深まるように意見を述べることができる。	3.0	3.2			3.1	3.3		
	さまざまな意見を比較、検討し、目標の達成に向けて、より良い考えを提案することができる。	3.1	3.3			3.1	3.4		

以上より、本研究において実施した ICT 活用による言語活動の場の設定が、有効だったことが分かる。しかし5学年「理解伝達」を見てみると、伸びが見られない項目も見られた。今後、検討していく必要がある。

(2) 児童の様子

ICT 常設教室の設置により交流が活性化したことで、児童生徒の関係性が向上した。実際に顔を合わせて交流する場面になっても、事前に交流をしていたことにより活動がスムーズに展開する場面が見られた。

6. 今後の課題・展望

(1) 課題：研修の活性化と非認知能力の評価

実践の主体が一部の教員にとどまってしまったという反省が挙げられた。今後、校内研修体制の改善を通して、共通理解を深めていくことが必要であると考えます。

また、児童生徒の交流を活性化させることにつながった両者の関係性の向上の背景にあった要因について調べていきたい。

(2) 展望：教科教室としての機能

ICT 常設教室は小中交流教室として機能しただけでなく、教科教室として機能した。本年度は、英語科と社会科である。これにより、教科特有の資料を掲示しておくことができたのはもちろん、デジタル教科書や、各種デジタル教材の活用も活性化した。

今後は、ICT 常設教室としての機能は維持しつつ、教科教室としてより洗練された交流活動の場を設定していきたい。

7. おわりに

つくば吾妻学園は、吾妻小学校と吾妻中学校による1小1中の施設隣接型の小中一貫教育校であるが、実際には小学校と中学校は約3km離れており、頻繁に往来することが難しいということを課題として述べた。今回の研究によって、この点が大きく改善されたと考える。ご指導ご助言頂いたすべての皆様に感謝し、今後も研鑽を深めていく。

8. 参考文献

- ・中山和彦, 東原義訓『未来の教室—マイコン・クラスルーム』筑波出版会, 1986年。
- ・国立教育政策研究所「社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則」2013年。